

# 生涯発達の観点からみた重要な他者との関係に 関する研究の動向と展望

— 発達初期の重要な他者との関係が後の発達に与える影響に着目して —

永田 彰子  
(2004年9月30日受理)

A Review and Some Considerations of Researches of the Relationships with Significant Others  
from the Viewpoint of Life-span Development

—Focusing on the Effect of the Relationships with Significant Others at an Early Stage on the Later Development—

Akiko Nagata

The purpose of this study is to discuss the effects of the relationships with the significant others at an early life stage on the development at a later life stage, from the viewpoint of life-span development. Based on a review of the articles studying the relationships with significant others, two aspects have been clarified: 1. The notion of linking secure relationships with specific significant others at an early life stage with later psychological adjustments seems insufficient to explain all the cases studied so far. 2. The factors that cause the continuity/discontinuity of the relationships with significant others have not yet been studied. The new notion of relatedness concerning the relationships with significant others, which is based on the viewpoint of identity development, is proposed to explain the mechanism causing the continuity/discontinuity.

Key words : Significant others, Continuity/discontinuity, Life-span development, Relatedness

キーワード：重要な他者，連続性・不連続性，生涯発達，関係性

## 1 はじめに

今日、家族、社会を取り巻くさまざまな状況が急速に変化する中、他者との関係の持つ意味が改めて問い直されている。近年、関係性の視点から人格発達をとらえ直そうとする試みが盛んに注目されるようになったことは、このような社会的問題意識の高揚と決して無関係ではない。一方、他者との関係といってもさまざまな文脈がある。本研究では、最も身近な対人的文

脈である「重要な他者との関係」を取り上げる。この文脈は、人間生活の生物学的、情緒的な側面において個人に与える影響が直接的でかつ重要であると考えられるからである。「重要な他者」として想定される者は親、配偶者、子ども、友人、恋人等である。

従来の重要な他者とのかかわりに関する研究領域においては、多くの場合、発達初期の養育者とのかかわりの経験が、後の人格発達に大きな影響を与えるということが指摘されてきた（例えばBowlby, 1969, 1973, 1980）。つまり、発達初期にポジティブ（ネガティブ）な関係を有した者は後のライフステージにおいてもポジティブ（ネガティブ）な関係を有する、または良好な（良好でない）社会的適応を示すという連続性に主に焦点があてられてきた。一方でネガティ

---

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：岡本祐子（主任指導教員）、前田健一、  
平田道憲

ブ(ポジティブ)な関係を有した者が後の発達段階においてポジティブ(ネガティブ)な関係を有する, または良好な(良好でない)社会的適応を示すという不連続性についても最近は検討がなされつつある(例えばLewis, Feiring, & Rosenthal, 2000; 清水, 1999; 山岸, 1997)。

本研究は, 発達初期の重要な他者との関係が後の人格発達に与える影響に関して, 生涯発達の観点からとらえ直すことを目的とする。本研究では, 以下の3つの目的に沿って論を進める。第1に, 本論文が生涯発達の観点から「重要な他者との関係」を捉え直すことに関する背景を愛着研究, 母子関係に関する精神分析学的研究の2領域について先行研究の流れに沿って整理する。第2に, 生涯発達の観点に立つ実証的な関係性研究について整理する。第3に, 整理された背景と先行研究を踏まえて, 生涯発達の観点に立つ「重要な他者との関係」に対する新しい視点を提示する。

## 2 「重要な他者との関係」に関する先行研究

ここでは, 愛着研究, 母子関係に関する精神分析学的研究から得られた知見を整理し, 重要な他者との関係に関する研究を展望してみたい。近接領域であるソーシャル・ネットワーク研究においても重要な他者との関係を取り上げた研究がみられる(例えば井上・高橋, 2000; Takahashi, 1990; Takahashi, Tamura, & Tokoro, 1997)。これらの研究は重要な他者の果たす機能や, 必要性の強さといった現象そのものを扱っている。一方で本研究は, 重要な他者との関係を維持したり変化させたりするものとしての関係性を力動論的観点から検討するものである。本研究では, 生涯発達を発達段階に応じた形で関係性が再体制化され続けることであるととらえており, このことを明らかにするためには力動論的な観点に基づく必要がある。従って, 本研究とソーシャルネットワーク研究とは研究目的の方向性が異なると考え, ここでは力動論的観点を取り入れている愛着研究, 母子関係に関する精神分析学的研究の2領域の先行研究を概観することとした。

### 2-1. 愛着研究

愛着理論を提唱したBowlby(1969)は, 愛着を「特定の人との愛情的な絆(bond)を結ぼうとする人間の傾向」と定義し, 「人間はどの年代においても, 信頼できる他者への接近と応答に確信があるとき最もよく適応しているが, 愛着行動を発達させることに失敗したり逸脱した個人は, 精神医学的混乱に最も陥りやすい」と説明した。愛着形成についての実証的研究は,

Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall(1978)が開発したストレンジ・シチュエーション法(Strange Situation Procedure, 以下SSPと呼ぶ)によって活性化し, 早期の子どもと養育者との相互作用が子どものパーソナリティや愛着の型に多大な影響を与えるとという極めて一貫した証拠が示された。1980年代半ばに入ると, SSPにみられる行動的指標で愛着の質を捉えていこうとする見解に対して, 内的ワーキングモデル(Internal Working Models, 以下IWMと呼ぶ)概念が注目を集めるようになった。個人の愛着の質を非言語的行動のパターンの違いから検討するだけでなく, 表象や言語レベルでの違いまで広げて研究することにより, 研究対象を乳幼児期以降に拡大している。

これまで, 我が国においても愛着研究の動向と題しての愛着研究のレビュー論文がいくつか報告されている(例えば, 遠藤, 1992a, 1992b; 金政, 2003; 久保, 1998; 佐藤, 1998)。しかし, 愛着研究の提唱者であるBowlbyの理論はきわめて多岐にわたるため, これまでのものは愛着研究のある特定の側面に焦点をあて論じているものが多い。また, 発達段階ごとに実証研究を整理したものが多く, 発達段階ごとの研究知見を見渡せるものの, これまでの多岐にわたる愛着研究がどのように分岐したかについて, 研究全体を網羅した上での今後の研究課題を指摘しにくい。そこで筆者は, 愛着理論のさまざまな側面に焦点をあてる先行研究のレビュー報告を概観し整理した上で, 図1に示すような愛着に関する実証研究の動向図を作成した。この図は, Bowlbyの愛着理論からAinsworthの実証研究, そしてそれ以降の分岐とその研究動向を整理したものである。図1と照らし合わせながら, 愛着研究の動向を整理してみたい。

まず, Bowlbyの提唱したIWMは, 図1に示すように5つの研究領域に分岐し実証的検討や理論的検討が行われた。それらは, 4つの実証研究領域であるI. 愛着関係についてのIWMと自己についてのIWM, II. Adult Attachment Interview(以下AAIと呼ぶ)の開発, III. IWMの変容可能性, IV. 不安定なIWMにおける防衛的排除過程と, V. IWMの定義の理論的検討である。それぞれの領域はその後さらなる展開を呈している。

まずIは, 愛着様式と自己認知・対人関係における適応との関連について検討するものへと展開している。それは幼児・児童を対象とする領域①と, 青年・成人を対象とする領域②である。これら2領域では対象者の違いはあるものの, 愛着人物との間に情緒的に安定した関係を形成している個人は, 自己についても安定的な表象を形成しているとともに, 後の対人関係

生涯発達の観点から見た重要な他者との関係に関する研究の動向と展望  
 — 発達初期の重要な他者との関係が後の発達に与える影響に着目して —

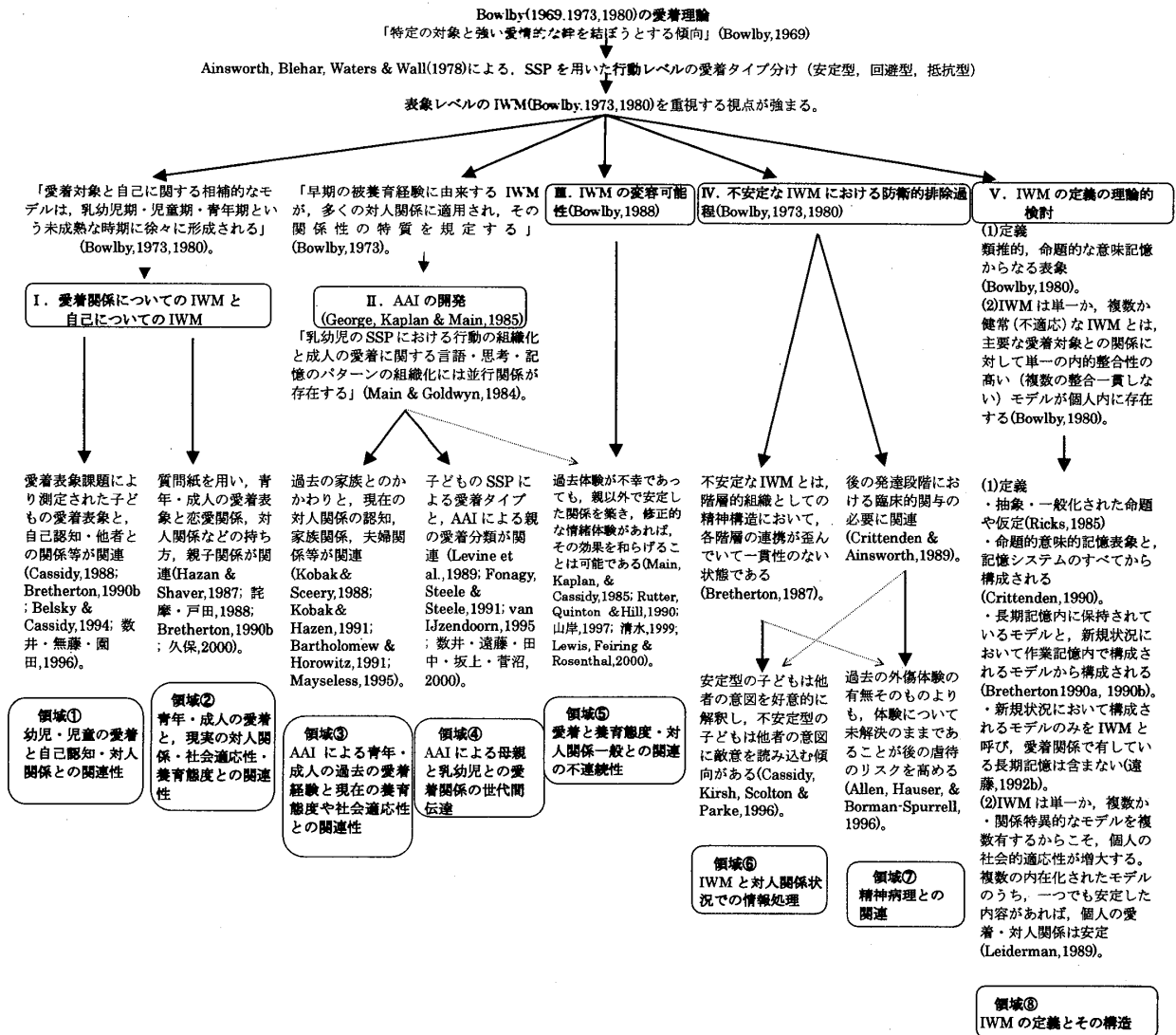


図1 Bowlbyの愛着理論およびその後の実証研究の展開  
 注 → 線は研究が矢印の先の領域に展開したことを示す。  
 ..... 線は矢印の先の領域にも関連を持っていることを示す。

状況においても適応的であることが指摘されている。AAIを用いて愛着を測定するIIは、愛着と社会的適応性との関連や、愛着と現在行っている養育態度との関連の領域③、愛着の世代間伝達を検証する領域④へと展開している。我が国でもAAIを用いた研究が行われ(数井・遠藤・田中・坂上・菅沼, 2000), 子どもの愛着との関連をみることにより, 世代間伝達の可能性が欧米圏と同様に示唆されている。

領域①, ②と, 領域③, ④は, 手法としてAAI法を用いているか否かの違いはあるが, 個人の愛着対象に関する肯定的なIWMが, 肯定的な自己認知や対人関係の持ち方, ひいては現在の親子関係や, 子どもの側のIWMに影響を与えるという結果を示唆しているという点においては共通の結果が導き出されているととらえられる。

IIIは, 領域⑤愛着と養育態度・対人関係一般との関連の不連続性へと展開している。この領域においては, 幼児期における過去体験が不幸であっても, 後の人生で親以外で安定した関係を築き, 修正的な情緒体験があれば, 後の人生に及ぼす不幸な過去の愛着のネガティブな影響を和らげることは可能であるということを検証している。近年の愛着研究においてはこの領域が注目を集めており, 不連続性についての議論が多くなされつつある。これについては後に詳述する。

IVは, 領域⑥IWMと対人関係状況での情報処理, 領域⑦精神病理との関連の2方向へと展開している。領域⑥では, 発達早期に形成された不安定なIWMは, それが偏った情報処理を行うために修正されにくいことや, その後の情緒的な成熟を抑制する悪循環を生み出すことになることが示されている。さらに臨床的

野である領域⑦では、親と子の不安定な愛着が、子どもの精神病理のリスク要因になること、そして最近では外傷経験そのものよりも体験について心理的に未解決であることが虐待のリスクを高めるといった研究報告が見られる。

Vは、Bowlby以降、IWMの安定性及び変化の可能性について、認知心理学からの知見を入れながら定義の再検討が試みられている。これが領域⑧IWMの定義とその構造をめぐる議論である。これについては、遠藤(1992b)に詳しく論じられているので参照されたい。

以上、愛着研究の動向を概観した。1980年半ば以降、広い年齢を対象として研究が行われるようになり、また近年ではAAIが大きく貢献したことにより、愛着理論は生涯発達理論としての有効性を示しつつある。これまで、乳幼児期における母子関係や親子関係と、後の発達段階における関係性の質や個人の社会的、情緒的応答性などとの関連について多くの証拠が示されてきた(図1領域①②③④⑥)。一方で、最近では不連続性を扱った領域の研究報告(図1領域⑤)が注目されている。しかし今のところ、発達初期にネガティブな関係を持った者が後の発達段階においてポジティブな関係を持つという負から正への不連続性の検証のみであり、正から負への不連続性を扱う研究はみられない。

これまで、不連続性についての検討では、過去体験が不幸であっても、親以外で安定した関係を築き、修正的な情緒体験があればその効果を和らげることが可能であるという愛着関係の変化について検討している。しかし、これらの研究においては、人生早期のライフステージにおける関係の質と成人になってからのライフステージにおける関係の質を比較、検討しているに過ぎない。これらは変化(不連続)の可能性を指摘できるものの、いかに変化したのか、変化を与える要因は何であったのか、について詳細に論じることに限界がある。つまり、安定型、不安定型で愛着関係を類型化する場合、IWMの変化がどのようにもたらされたのかについては、環境的要因の変化の記述にとどまり、IWMそのものの変化を生じさせるメカニズムについて言及することは困難と思われるからである。山岸(1997)は、青年後期から成人初期の4年間の生活面での経験や変化、重要な人物との関係などについて検討し、IWMの変化について示唆的な考察をしている。しかし「親とのトラブルを経てカウンセリングや信仰によって変わった」というように、新たな出会いや内省により運命的なIWMの変化は起きたものの、なぜ、どのように変化が起きたのかという変化そのもの

のメカニズムは明確ではない。従来の安定型・不安定型の類型化にどのように発達の視点を組み込んでいくのかという大きな問題が浮かび上がってくる。これを可能にするには、発達の観点にもとづく新たな概念枠組みが必要なのではないだろうか。これについては4で提案したい。

## 2-2. 母子関係に関する精神分析学的研究

発達研究の主たる関心は、個体能力の発生過程の記述に向けられていた。したがって、個体の発達を周囲の他者との関係において、さらには文化環境との関連において考える動きは、発達研究そのものよりも、むしろ精神分析諸学派にその先駆けを見出すことができる(鯨岡, 1999, p.38)。ここでは、特に発達初期の母子関係に関する先行研究の知見を整理することにす

る。精神分析の創始者Freud(1905/1969)は、神経症をはじめとする成人の患者の示す対人的葛藤の源は、乳幼児期の対象関係(親子関係)にあると考えた。Freud以降では、内的対象理論を唱えたKlein(1975/1983)、自我の機能を欲動関係とは異なる自我と対象との関係調整機能であるとみなすFairbairn(1952)、発達過程で果たす母親の積極的な役割について「ほば良い母親」という概念で説明したWinnicott(1965)などがあげられる。Freudの人格発達論は、上記の対象関係学派の流れとは異なる自我発達論の方向(例えばErikson, 1950; Freud, A, 1966; Mahler, Pine, & Bergman, 1975; Spitz, 1950, 1957, 1965)へと続く自我発達論の方向にも展開した。ところで、これらの精神分析の発達論では、乳幼児期から思春期までの発達がとりわけ重要とされていた。Freudの心理・性的発達論に強く影響を受けながらも、人間生涯全般にわたる発達論を展開したのが、アイデンティティ論の提唱者Erikson(1950)である。Eriksonの提唱した「人間の8つの発達段階」と題する人間生涯全般にわたる発達論は、後のライフサイクル研究、特に成人期の発達の研究に理論的基礎を与えるものとなった。

Greenberg & Mitchell(1983)は精神分析のパラダイムには2つあると区分している。1つはFreudのモデルに基づいて、心の構造は本能的欲動に基づいて形成されるとする「欲動/構造モデル」であり、もう1つはFairbairnとSullivanの理論を発端として、心の構造は他者との関係から生まれると考える「関係/構造モデル」である。現代の精神分析は、患者と分析家の双方が積極的参加者として精神分析的対話の形式と内容を共構築していくという関係的、間主観的な観点へと移行しつつある(Lyon-Ruth, 1999)。そして、「関係/構造モデル」あるいは現代精神分析は古典的

精神分析の幾つかの主要側面に反対したという意味で愛着理論と共通している (Eagle, 1997)。つまり、愛着研究は、乳児の無意識的幻想よりも養育者との現実的相互作用の影響力を重視する‘関係／構造モデル’と理論的に共通するだけでなく、実証的基盤を提供すると言えるだろう (三上, 2003)。このような背景から、母子関係に関する精神分析学的研究には、愛着理論を踏襲した治療介入について論ずる研究が比較的多い (例えば Fonagy, 1995, 2000, 2001; Holmes, 2000)。

近年、親子治療として発展している心理的サポートが注目されている。もともとは乳児を扱う治療的作業として Fraiberg (1980) によって紹介されたものであり、Lieberman & Pawl (1990) はこの理論に愛着理論を付け加え、親の現在の苦勞を理解し支持することに焦点をあてた。親の怒りや失望は過去から引き出されたものではあるが同時に現在においてもそのような悲惨な状態があるのであり、治療は過去の感情を過去に戻し、その葛藤を現在に投影することを防ぐものであると考えたからである。

Fonagy (1991) は片方の親がもう一方の親と乳児との関係を促進することも妨害することもあり得るとしている。この点について、Winnicott (1965) も、もし母親に未解決の葛藤がありその子どもに十分に関われない場合には、それを支え解放する役目をとることができるのもう一方の父親であると述べている。近年の治療介入においての心理的サポートへの注視は、子育てに対する文化的態度の大きな変化と親へのサポートの供給の必要性を明確にすることが重要であることを示していると言えよう。

初期の精神分析学の諸説においては、人の内的世界は乳幼児期にその基礎を持ち、中でも主に母子関係の文脈で展開されてきた。こうした理論の共通した認識は、内在化された母親、あるいは関係の表象に関連させて、子どもが自己の感覚を発達させるということであり、そしてこの早期の自己の定義、自己の意識や、母親との関係をめぐる問題の連想、記憶、感情が、その後の対人関係、ひいては自らが親となったときの親子関係に決定的な意味を有するということである (Chodorow, 1978)。このような初期の精神分析学的観点からの母子関係研究は、生物学的な母子を強調しすぎる傾向があった (鯨岡, 1999, p.58)。患者の病理的事態を説明する考え方が臨床経験の蓄積の中で有効であったために、一般の母親に対する行動のガイドラインとして誇張され、一般化されてしまったことに問題があると思われる。最近では‘関係／構造モデル’の注目への移行に伴い関係性により重点が置かれ

るようになってきた。つまり、子どもの発達過程における母親による現実的な養育体験あるいは現実的対人関係の重視である。長期にわたる人間の育児に、生物学的な要因以外の多様な要因が複雑に関与する (大日向, 2001) という点を再度認識し、家族内力動関係や社会的文化的環境の問題も含め、包括的・多面的に母子関係をとらえる方向へと変化しつつあると言えよう。

### 3 生涯発達研究領域における関係性への注視

生涯発達研究に大きく貢献した第一人者は、アイデンティティ論の提唱者 Erikson であろう。彼は、発達の視点から人生全般を理解する理論的基礎を提供し、近年の成人発達研究に大きな影響を及ぼしてきたと言える。Erikson は、個人の自我は、他者との相互的なかわりのなかから現れることを強調し、人格発達における他者との関係性の役割を重視したが、彼の提唱したアイデンティティの概念を実証しようとする研究者達は、この側面をしばしば見落としてきた。それは、当時の研究者達が、西洋的な男性優位の個人主義の中で、自律や他者からの分離、つまり個の確立を発達の最優先課題としてきたからである。これに異論を唱えたのが、女性のアイデンティティ発達を手がける研究者達 (例えば Gilligan, 1982; Josselson, 1973, 1982, 1987, 1992, 1994) であった。

これらの研究は、まず、女性の発達においては他者との関係性が重要であること、そして関係性をもつことが自律や達成をめざすことと同じくらい発達にとって価値があることを個の確立を重視するアイデンティティ研究者に強く認識させた。そして近年では、関係性の重要性を指摘する研究者達により、関係性の問題は女性のみではなく男性にとっても重要な、いわばアイデンティティの基本的な要素であることが指摘されている (例えば, Archer, 1993; Josselson, 1994; Marcia, 1993)。このように、アイデンティティ研究において関係性が重視されるようになってきているという動向を踏まえると、今後は、他者との関係性の中の個人のあり方が、アイデンティティ発達の重要な要素であると考えられる必要がある (例えば 岡本, 1999, 2002; 杉村, 1998, 2001)。

先に指摘した個の確立の強調という研究の流れの中にあって、Franz & White (1985) は、人格発達についての「複線モデル」(two-path model) を提示し、人間の生涯発達を individuation (個性化) の発達と attachment (愛着) の発達という2つの経路で理解し

ようと試みた。我が国においてもこれと類似した視点で検証したものとして、伊藤（1993）の人間発達を「個人志向性と社会志向性の統合」からとらえたものがみられる。

このように生涯発達の研究においては、他者との関係が個人のあり方における重要な要因として重要視されるようになってきている。

#### 4 生涯発達の観点からみた「重要な他者との関係」に関する新しい視点

以上概観したように「重要な他者との関係」についてさまざまな研究が行われてきた。これまでの愛着研究と母子関係に関する精神分析学的研究の多くは、乳幼児期の養育者とのかかわりの経験が、後の人格発達に大きな影響を与えることを指摘してきた（例えば Bowlby, 1969, 1973, 1980; Chodorow, 1978）。ようやく近年、不連続性についての議論が盛んになされつつある。生涯発達の観点に立つ場合、乳幼児期における愛着の重要性は否定されるべきものではないが、その後の経験もそれが愛着を豊かにするものであれば剥奪的なものであれば、同様に人間の発達の連続性と不連続性に影響を及ぼす（清水, 1999）と考えられる。しかし一方で、これまでの研究においては連続性・不連続性を生起させる要因は何かについての検討がなされてこなかったことが指摘される。

人は、子どもから大人になるまでにさまざまな対人経験をもち、発達初期に重要な他者との関係の中で構築された他者との関係の中での自分自身のあり方は、それ以降の対人経験により、影響を受けたり、修正されたりしながら現在にいたっていることが予想される。そしてこのようなあり方が修正されたり再構築されたりすることが、現在の重要な他者との関係にも影響を及ぼしていることが考えられる。生涯発達の観点で他者とのかかわりをとらえるならば、人は他者との関係の中で自己自身のあり方のとらえ直しを行い続ける存在であると言えないだろうか。筆者は特に重要な他者との関係に注目し、「重要な他者との関係をとおして構築される他者との関係の中での自己自身のあり方」を関係性にとらえている。

岡本（1994）は、中年期以前に獲得されたアイデンティティが、中年期に崩壊あるいは動揺し、再び組み直されて安定した自己のあり方が形成されていく過程、つまりアイデンティティ再体制化の過程について論じている。このような危機期における心身の諸変化は、個人内の次元にとどまらず、重要な他者との関係

そのものやそれらの関係の中での個人の他者へのあり方にも影響を与えていることが推測される。この意味において、再体制化の視点は、個としてのアイデンティティの発達・変容のみならず、関係性の発達に関する研究にも応用できると考えられる。

先に指摘したように、発達初期の重要な他者との関係の類型化のみで後の発達段階の関係や適応をも説明しようとする考え方では、不連続の生起のメカニズムを記述する場合に、新しい重要な他者との運命的な出会いによりネガティブからポジティブへと移行したなど、環境要因の変化の記述に留まってしまう恐れがある。ここで重要となってくるのは、なぜ変化が生じるかという問題をどのようにとらえるかである。

この問題に対して、アイデンティティ論は重要な視点を提供してくれると筆者は考えている。近年のアイデンティティ研究において、「両親・友人・恋人といった他者との関係性は、アイデンティティを形成するための不可欠な“土壌”として存在する」（杉村, 1999, p.64）ことが強調されており、関係性の中での個人の主体的なかかわりや位置付けが重要視されている。つまり、重要な他者との関係で生じるさまざまな事柄を自己自身を成長・発達させる土壌、言い換えれば自己自身の人生において意味あることとしてとらえているかという内在化の視点である。上述した不連続のメカニズム、例えばネガティブからポジティブへの移行という変化がなぜ生じるのかは、この内在化にかかわっているのではないだろうか。

実は、この内在化の視点はAAIを中心とした愛着研究においても“統合”（Main, Kaplan, & Cassidy, 1985）として着目されている。つまり、過去に愛着の外傷経験があったか否かという過去体験そのものが重要なのではなく、現在それをどのように統合しているかが問題にされる。そしてこの“統合”が、不安定的愛着から安定的愛着への変化を生じさせると解釈されている。しかし先に述べたように、安定型、不安定型という類型化で個人をみる限りは、‘統合’が生まれる発達のメカニズムは説明できないのではないだろうか。例えば、発達初期にネガティブな愛着経験により不安定型であった者が、成人期において新たな重要な他者との出会いにより‘統合’の作業が促進され、安定型に変化したとする。一方で、発達初期から安定型であった者が後の発達段階においても安定型であり続けた場合、その個人が統合の作業を経験しているか否かについてはこれまでの研究からは明らかではない。つまり、これまでの研究からは不安定から安定へ移行する重要な条件としての‘統合’は示されているが、‘統合’が安定から安定へ移行するための条件で

もあるかは示されていない。不安定から安定、安定から安定への移行と‘統合’の作業の有無との関係が未だ不明瞭なのである。さらに‘統合’の作業を生み出すメカニズムはいかなるものかについても検討がなされていない。そこで、安定・不安定の類型化に対して、発達の観点に基づく類型化を提案したい。

筆者は上述の両者の関係の不明瞭さを解決する糸口として、現象的な‘重要な他者との関係’と、関係の中で構築される‘関係性’（他者との関係の中での個人のあり方）を別の概念として考えている。そしてライフサイクルをとおした重要な他者との関係の連続性や不連続性を生じさせる発達のメカニズムとして関係性を位置付け、連続性・不連続性と関係性との関連について明らかにする。関係性については発達の観点に基づいた関係性の類型化を行うことにより、ポジティブからポジティブ、ネガティブからネガティブへの連続性はどのようにしてもたらされるのか、またネガティブからポジティブ、ポジティブからネガティブへの不連続はどのようにしてもたらされるのかが明らかになるのではないかと考えている。

筆者は、ライフサイクルをとおした複数の重要な他者との関係について成人中期男女を対象に半構造化面接調査を実施し、関係性の再体制化という観点から重要な他者との関係の連続性・不連続性について検討を行った（永田，2002）。関係性の指標はアイデンティティ理論の先行研究の知見に基づき、以下の2点から構成されている。1つは、ライフサイクルにわたるネガティブ・ポジティブな重要な他者との関係そのもの

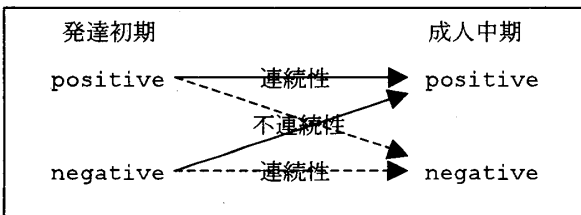


図2 重要な他者との関係の連続性・不連続性と関係性の再体制化との関係

- 注1. —→ 関係性の再体制化が生じている。  
 ---→ 関係性の再体制化が生じていない。
- 注2. 永田（2002）ではそれぞれのライフステージにおいて有した複数の重要な他者との関係において経験した関係の質を総合的に評価し、ライフステージごとに positive, neutral, ambivalent, negativeで評定を行った。図2は重要な他者との関係の連続性・不連続性と関係性の再体制化の関係を分かり易く示すことを目的とした。従って、図中ではneutral, ambivalentは省略し、positive, negativeのみで図示した。
- 注3. 青年期も含めた検討については今後の課題としたい。

を自分自身の人生において意味あることとして位置付けているか否かという主体的位置付けである。2つには、他者への積極的関与つまりコミットメント意識である。これについてはコミットメントの対象が自分にとっての重要な他者との関係をより良いものにしようという限定された文脈に留まらず、コミットメントが他の人間関係にも反映されるという視野の広がり、つまりコミットメントの普遍化に着目した。分析の結果、発達初期から成人中期への重要な他者との関係の連続性・不連続性を生じさせる発達のメカニズムとしての関係性の再体制化が示唆された。関係性の再体制化とは重要な他者との関係におけるさまざまな危機により上記の2つが問い直され、新たに構築されるということを示している。これを分かり易く簡略的に示したものが図2である。

発達初期にポジティブな関係を有した者でその後の発達段階においてもポジティブな関係を有した者は、ただ単に出会った重要な他者との関係がポジティブなものであったという単純な図式ではなく、他者との関係の中での自己自身のあり方（関係性）が再体制化されるということがポジティブからポジティブという連続性の生起に寄与していた。つまり、重要な他者との葛藤や危機を経験し、その危機をとおして主体的位置付け（関係性構成概念1）がなされたり、重要な他者との関係で経験したことが他の人間関係一般にも反映されるというコミットメントの普遍化（関係性構成概念2）が起こったこと（関係性の再体制化）で、結果として成人中期の重要な他者とのポジティブな関係が得られたと考えられる。またネガティブからネガティブへの連続性の場合、重要な他者との関係における危機を、危機として認識できず、防衛的に排除しているということがデータにおいて認められた。これは、主体的位置付けの作業がなされない、コミットメントの普遍化が起こらない、つまり関係性の再体制化が生起していないことがネガティブからネガティブへの連続性に関連していると考えられる。

また、関係性の再体制化がどのようにもたらされたのかという再体制化プロセスについて明らかにすることも必要である。生涯発達の観点に立つ場合、関係性の発達プロセスを理論化、モデル化していくことは、対人関係の理解に貢献するであろう（例えば永田・岡本，投稿中）。

永田（2002）はライフサイクルを通じた複数の重要な他者との関係を取り上げた。急速な時代の変化に伴い、家族のあり方そのものが揺らいでいる現代においては、母子関係のような特定の重要な他者との安定的な関係の構築と適応とを結び付ける一様化は、慎重

に吟味される必要がある。この意味において、母子関係といったある特定の文脈のみではなく、複数の重要な他者との関係でとらえるという視点は非常に有効であると思われる(例えば井上・高橋, 2000; Takahashi, 1990; Takahashi, Tamura, & Tokoro, 1997)。

## 5 まとめ

近年の重要な他者との関係に関する研究領域においては、発達初期の重要な他者との関係が後の人格発達に影響を及ぼし続けるという確固とした連続性の提示から、不連続性に関する実証的・臨床的報告やどのような状況下で不連続性が発生するのかという問題への関心へと移行してきている。一方で、今のところ正から負への不連続については報告はなされていない。しかし、後の人生に与える発達初期の影響について過度に誇張しないという研究動向の変化を踏まえれば、正から負への不連続の可能性についても当然押さえて置く必要があると思われる。

また、どのような要因が連続性の維持や不連続性の生起をもたらすのかを検討するには、安定・不安定という類型として個人をみるのではなく、発達の観点に基づく類型という新たな概念枠組みが重要になるのではないかとすることを提案した。また生涯発達の観点に立つ関係性の発達プロセスをモデル化していくことにより、教育的・臨床的介入への示唆が得られると考えられる。

さらに、激しい社会変動に伴うライフスタイルや家族形態の変化をみると、ある単一の重要な他者との関係の文脈がどの個人にも同じ心理的機能を持つという前提で検討することは是非も考慮に入れる必要があるだろう。発達初期においては生命の保護という観点から、重要な他者は養育者に限定される。しかしそれ以降の発達段階においては当然重要な対人関係は拡大し、複数の重要な他者が現れてくるだろう。この意味で、ある単一の文脈での安定・不安定のみを扱うのではなく、同時に複数の重要な他者を視野に入れるという視点も非常に有効であると思われる。

### 【引用文献】

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Allen, J.P., Hauser, S.T., & Borman-Spurrell, E. 1996 Attachment theory as a framework for understanding sequelae of severe adolescent psychopathology: An 11-year follow-up study. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **64**, 254-263.
- Archer, S.L. 1993 Identity in relational contexts: A methodological proposal. In J.Kroger (Ed.), *Discussions on Ego Identity* (pp.75-99). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Bartholomew, K. & Horowitz, L.M. 1991 Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Belsky, J., & Cassidy, J. 1994 Attachment theory and evidence. In M.L. Rutter, D.F. Hay, & S. Baron-Cohen (Eds.), *Development through life: A handbook for clinicians* (pp.373-402). Oxford: Blackwell.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss: Vol.1 Attachment*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss: Vol.2 Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and loss: Vol.3 Loss: Sadness and depression*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. 1988 *A secure base*. New York: Basic Books.
- Bretherton, I. 1987 New perspectives on attachment relations: Security, communication, and internal working models. In J. Osofsky (Ed.), *Handbook of Infant Development* (pp.1061-1100). New York: Wiley.
- Bretherton, I. 1990a Communication patterns, internal working models, and the intergenerational transmission of attachment relationships. *Infant Mental Health Journal*, **11**, 237-252.
- Bretherton, I. 1990b Open communication and internal working models: Their role in the development of attachment relationships. In R.A. Thompson (Ed.), *Nebraska symposium on motivation: Socioemotional development* (pp.57-113). Lincoln, NE: University of Nebraska Press.
- Cassidy, J. 1988 Child-mother attachment and the self in six-year-olds. *Child Development*, **59**, 121-134.
- Cassidy, J., Kirsh, S.J., Scolton, K.L., & Parke, R.D. 1996 Attachment and representations of peer relationships. *Developmental Psychology*, **32**, 892-904.
- Chodorow, N. 1978 *The reproduction of mothering*. California: University of California Press.
- Crittenden, P.M., & Ainsworth, M.D.S. 1989 Attachment and child abuse. In D. Cicchetti & V. Carlson (Eds.), *Child maltreatment* (pp.432-463). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Crittenden, P.M. 1990 Internal representational models of attachment relationships. *Infant Mental Health Journal*, **11**, 259-277.
- Eagle, M. 1997 Attachment and Psychoanalysis.



- British Journal of Medical Psychology*, **70**, 217-229.
- 遠藤利彦 1992a 内的作業モデルと愛着の世代間伝達. 東京大学教育学部紀要, **32**, 203-220.
- 遠藤利彦 1992b 愛着と表象 — 愛着研究の最近の動向: 内的作業モデル概念とそれをめぐる実証的研究の概観 —. 心理学評論, **35**, 201-233.
- Erikson, E.H. 1950 *Childhood and society*. New York: Norton.
- Fairbairn, W.R.D. 1952 *An object relation theory of the personality*. New York: Basic Books.
- Fonagy, P. 1991 Measuring the ghost in the nursery. *Bulletin of the Anna Freud Centre*, **14**, 115-131.
- Fonagy, P., Steele, H., & Steele, M. 1991 Maternal representations of attachment during pregnancy predict the organization of infant-mother attachment at one year of age. *Child Development*, **62**, 891-905.
- Fonagy, P. 1995 Playing with reality: The development of psychic reality and its malfunction in borderline personalities. *International Journal of Psycho-Analysis*, **76**, 39-44.
- Fonagy, P. 2000 Attachment and borderline personality disorder. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, **48**, 1129-1146.
- Fonagy, P. 2001 *Attachment theory and psychoanalysis*. New York: Other Press.
- Fraiberg, S. 1980 *Clinical studies in infant mental Health*. Tavistock.
- Franz, C.E., & White, K.M. 1985 Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, **53**, 224-256.
- Freud, A. 1966 *The ego and the mechanisms of defense* (rev. ed.). New York: International Universities Press.
- Freud, S. 1969 フロイト著作集第5巻, 性欲論・症例研究. (懸田克躬・高橋義孝, 訳). 京都: 人文書院. (原著刊行年次, 1905年)
- George, C., Kaplan, N., & Main, M. 1985 *An adult attachment interview: Interview protocol*. Unpublished manuscript, Department of Psychology, University of California, Berkeley.
- Gilligan, C. 1982 *In a different voice*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Greenberg, J.R., & Mitchell, S.A. 1983 *Object relations in psychoanalytic theory*. Cambridge: Harvard University Press.
- Hazan, C., & Shaver, P. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- Holmes, J. 2000 Attachment theory and psychoanalysis: A rapprochement. *British Journal of Psychotherapy*, **17**, 157-172.
- 井上まり子・高橋恵子 2000 小学生の対人関係の類型と適応 — 絵画愛情関係テスト (PART) による検討 —. 教育心理学研究, **48**, 75-84.
- 伊藤美奈子 1993 個人志向性・社会志向性に関する発達の研究. 教育心理学研究, **41**, 293-301.
- Josselson, R.L. 1973 Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, **2**, 3-52.
- Josselson, R.L. 1982 Personality structure and identity status in women as viewed through early memories. *Journal of Youth and Adolescence*, **11**, 293-299.
- Josselson, R.L. 1987 *Finding herself*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Josselson, R.L. 1992 *The space between us*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Josselson, R.L. 1994 Identity and relatedness in the life cycle. In H.A. Bosma, T.L.G. Graafsma, H.D. Grotevant, & D.J. de Levita (Eds.), *Identity and development: An interdisciplinary approach* (pp.81-102). Thousand Oaks, CA: Sage.
- 金政裕司 2003 成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望 — 現在, 成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは — 対人社会心理学研究, **3**, 73-84.
- 数井みゆき・無藤 隆・園田菜摘 1996 子どもの発達と母子関係・夫婦関係: 幼児を持つ家族について. 発達心理学研究, **7**, 31-40.
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹 2000 日本人母子における愛着の世代間伝達. 教育心理学研究, **48**, 323-332.
- Klein, M. 1975 *Writing of Melanie Klein Vol.3: Love, guilt, and representation and other works* (1933-1945). The Melanie Klein Trust. (西園昌久・牛島定信, 責任編訳 1983 メラニー・クライン著作集3 愛, 罪そして償い 東京: 誠心書房)
- Kobak, R.R., & Hazan, C. 1991 Attachment in marriage: Effects of security and accuracy of working models. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 861-869.
- Kobak, R.R., & Sceery, A. 1988 Attachment in late adolescence: Working models, affect regulation and representations of self and others. *Child Development*, **59**, 135-146.
- 久保 恵 1998 愛着とワーキングモデル. 京都大学教育学部紀要, **44**, 313-324.
- 久保 恵 2000 愛着表象の投影法的研究 — 親子状況刺激画を用いて —. 心理学研究, **70**, 477-484.
- 鯨岡 峻 1999 関係発達論の構築. 京都: ミネルヴァ書房.
- Leiderman, P.H. 1989 Relationship disturbances and development through the life cycle. In A.J. Sameroff, & R.N. Emde (Eds.), *Relationship disturbances in early childhood* (pp.165-190). New York: Basic.
- Levine, L., Ward, M., & Carlson, B. 1989 Attachment across three generations: Grandmother, mother, infants. Paper presented at World Association of Infant Psychiatry and Allied Disciplines, Lugarno.

- Lewis, M., Feiring, C., & Rosenthal, S. 2000. Attachment over time. *Child Development*, **71**, 707-720.
- Lieberman, A.F., & Pawl, J.J. 1990 *Disorders of attachment and secure base behavior in the second year of life*. In M.T. Greenberg, D. Cicchetti, & E.M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool years* (pp.375-397). Chicago: University of Chicago press.
- Lyon-Ruth, K. 1999 The two-person unconscious intersubjective dialogue, enactive relational representation, and the emergence of new forms of relational organization. *Psychoanalytic Inquiry*, **19**, 576-617.
- Mahler, M.S., Pine, F., & Bergman, A. 1975 *The Psychological birth of the human infant*. New York: Basic Books.
- Main, M., & Goldwyn, R. 1984 Predicting rejection of her infant from mother's representation of her own experience: Implications for the abused-abusing intergenerational cycle. *Child Abuse and Neglect*, **8**, 203-217.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. 1985 Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. In I. Bretherton, & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50**, 66-104.
- Marcia, J.E. 1993 The relational roots of identity. In J. Kroger (Ed.), *Discussions on ego identity* (pp.101-120). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Mayseless, O. 1995 Attachment patterns and marital relationships. In S. Shulman (Ed.), *Close relationships and socioemotional development*. Ablex. pp.185-202.
- 三上謙一 2003 精神分析の「関係／構造モデル」から見た愛着理論の臨床的意義. 東京都立大学心理学研究, **13**, 1-8.
- 永田彰子 2002 重要な他者との関係性に関する生涯発達の研究：関係性の再体制化という視点から. 広島大学大学院教育学研究科修士論文（未公刊）.
- 永田彰子・岡本祐子 重要な他者との関係をとおして構築される関係性発達の検討（投稿中）.
- 大日向雅美 2001 母性研究の課題：心理学の研究は社会的要請にいかに応えるべきか. 教育心理学年報, **40**, 146-156.
- 岡本祐子 1994 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究. 東京：風間書房.
- 岡本祐子（編著） 1999 女性の生涯発達とアイデンティティ. 京都：北大路書房.
- 岡本祐子（編著） 2002 アイデンティティ生涯発達論の射程. 京都：ミネルヴァ書房.
- Ricks, M.H. 1985 The social transmission of parental behavior: Attachment across generations. In I. Bretherton, & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research. Monographs for the Society for Research in Child Development*, **50**, 211-227.
- Rutter, M., Quinton, D., & Hill, J. 1990 Adult outcome of institution-reared children: Males and females compared. In L.N. Robins & M. Rutter (Eds.), *Straight and devious pathways from childhood to adulthood* (pp.135-157). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 佐藤 徳 1998 内的作業モデルと防衛的情報処理. 心理学評論, **41**, 30-56.
- 清水弘司 1999 幼児期の母子分離型と青年期の自己像：連続性と転機の検討. 発達心理学研究, **10**, 1-10.
- Spitz, R.A. 1950 Anxiety in infancy: A study of its manifestations in the first year of life. *International Journal of Psychoanalysis*, **31**, 138-143.
- Spitz, R.A. 1957 *No and yes*. New York: International Universities Press.
- Spitz, R.A. 1965 *The first year of life*. Madison: International Universities Press.
- 杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し. 発達心理学研究, **9**, 45-55.
- 杉村和美 1999 現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達. 岡本祐子（編）, 女性の生涯発達とアイデンティティ (pp.55-86). 京都：北大路書房.
- 杉村和美 2001 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求：2年間の変化とその要因. 発達心理学研究, **12**, 87-98.
- Takahashi, K. 1990 Affective relationships and their lifelong development. In P.B. Baltes, D.L. Featherman, & R.M. Lerner (Eds.), *Life-span development and behavior: Vol.10* (pp.1-27). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Takahashi, K., Tamura, J., & Tokoro, M. 1997 Patterns of social relationships and psychological well-being among the elderly. *International Journal of Behavioral Development*, **21**, 417-430.
- 詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論から見た青年の対人態度：成人版愛着スタイル尺度の試み. 東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.
- van IJzendoorn, M.H. 1995 Adult attachment representations, parental responsiveness and infant attachment: A meta-analysis on the predictive validity of the Adult Attachment Interview. *Psychological Bulletin*, **117**, 387-403.
- Winnicott, D.W. 1965 *The family and individual development*. London: Tavistock.
- 山岸明子 1997 青年後期から成人期初期の内的作業モデル：縦断的研究. 発達心理学研究, **8**, 206-217.  
（主任指導教員 岡本祐子）